

北スラウェシの過去における海洋資源利用  
——タラウド諸島の事例を中心に——

**Past Exploitation of Marine Resources in Northern Sulawesi:  
The Case of Talaud Islands, North Sulawesi, Indonesia**

小野 林太郎\*  
Rintaro ONO

**Abstract**

This paper aims to report the recent archaeological research in Sangihe-Talaud Islands, North Sulawesi, and some results of the analysis obtained in 2006/2007. The archaeological research was conducted as a joint research with Indonesian counterpart (*Balai Arkeologi Manado* and *Pusat Arkeologi Indonesia*) in 2004 to 2006, and the excavation was conducted at four major sites; Leang Sarru site (BP30,000-10,000) and Bukit Tiwing site (BP600-200) in Saribabu, Talaud Islands, Leang Buida site (estimated to be formed during BP1000-400) in Kabaruan, Talaud Islands, and Leang Bowolebah (estimated to be formed after BP300) in Sangihe Besar Island. This paper presents the detail results of analysis on shell remains excavated from the Leang Sarru site, which is the oldest archaeological site formed during the late Pleistocene in North Sulawesi.

**I. はじめに**

インドネシアで地方分権化が実施されて以来、本稿の対象地域であるスラウェシ北部域でも地方政府の支配構造を中心に、様々な変化が生じている。1999年には北スラウェシ州からゴロンタロ州が分離し、さらに2003年にはサンギル県からタラウド諸島がタラウド県として分離した。こうした近年におこった行政上の組み換えが、各地における自然資源の利用や管理にも新たな変化を生みつつあることは明らかである。しかし、そうした変化を検討する作業には、地方分権化以降における現状を確認するとともに、それ以前の時代における状況を確認する必要がある。その際に対象とすべき時代としては、インドネシアにおいて地方分権化が実施される直近の10年間、あるいはインドネシアが独立して以降の40年間という時間スパンがまず考えられるかもしれない。

これに対し、本稿が検討を試みようとしている時間の範囲はより長期的なものとなる。具体的には、本稿が対象とする北スラウェシ州やサンギヘ・タラウド諸島に人類が到達した時代から現代までが、その範囲である。その理由として、人々による自然資源の利用を国家や

---

\*国立民族学博物館 ; National Museum of Ethnology

地方政治の枠組みからだけでなく、より広く人間と環境、あるいは人類生態史的な枠組みからも見ていく必要があることをあげたい。なぜなら、人間による自然資源の利用という行為を決定する要因には、政治的な要因だけでなく、その主体となる人々の社会や文化的な要因のほか、利用される自然資源を規定する生態的な要因も同時に存在しているからである。人々による自然資源の利用や管理を検討するには、こうした人類生態史的な視点をふくめた多角的な分析も求められるのではないだろうか。

そこで本稿では、これまで筆者がおこなってきた考古学調査の概要を紹介した上で、北スラウェシ州における人類史と海洋資源の利用のうち、筆者がおもに実施してきた発掘調査の分析結果が得られている更新世期の海洋資源利用について論じたい。

## II. 北スラウェシ州の考古学とその現状

北スラウェシ州での考古学調査の歴史は新しく、本格的な発掘調査は1972年にオーストラリア国立大学のピーター・ベルウッドの主導によって、ミナハサ半島のパソとタラウド諸島において実施された研究を嚆矢とする。しかし、その後の20年間は北スラウェシ州で発掘調査が実施されることはなかった。その要因として、北スラウェシ州には考古学を専門とする研究機関が大学等をふくめ存在していなかったことが指摘できる。

これに対し、ジャカルタに本部を置くインドネシア考古学センターは、1992年に北スラウェシ州の州都であるマナドに考古学センターの支部を新たに設置した。これを機に北スラウェシ州では、インドネシア人考古学者による発掘調査や遺跡調査が飛躍的に増加していくこととなった。しかし、発掘調査の多くは予算の関係から小規模なものが多く、科学年代測定や出土遺物の科学的分析なども実施することができない状態にある。つまり、発掘された遺跡や遺物の数は激増したものの、そこで出土した遺物の詳細な分析とその成果がほとんど発表されておらず、研究成果の反映という側面では、北スラウェシ州の考古学は未だに後進地域となっている。

このようなインドネシア側の研究状況を進展させる目的と、筆者自身の研究におけるこの地域への関心から、2004年度より筆者はマナド考古学支局との共同調査として発掘調査を実施してきた<sup>1</sup>。おもな調査地は、北スラウェシ州の離島部に位置するサンギヘ・タラウド諸島で、旧石器時代から歴史時代にまで至るいくつかの遺跡を対象としてきた。これらは、タラウド諸島のサリバブ島に位置するリアン・サル遺跡（旧石器代、BP30,000～10,000年）、ブキット・ティウイン遺跡（BP600～200年）、カバルアン島に位置するリアン・ブイダ遺跡（推定BP1,000～400年頃）、およびサンギヘ諸島の大サンギル島に位置するリアン・ボラレバ遺跡（推定BP300年前後）の4遺跡である（図1）。

<sup>1</sup> このうち2004年度、および2005年度に実施された発掘調査は、筆者が平成14年度・15年度文部省科学研究費補助金・特別研究員奨励費の一部を利用して、マナド考古学支局と実施したものである。

2004～2005年に踏査・発掘した主な遺跡 □ (発掘遺跡)

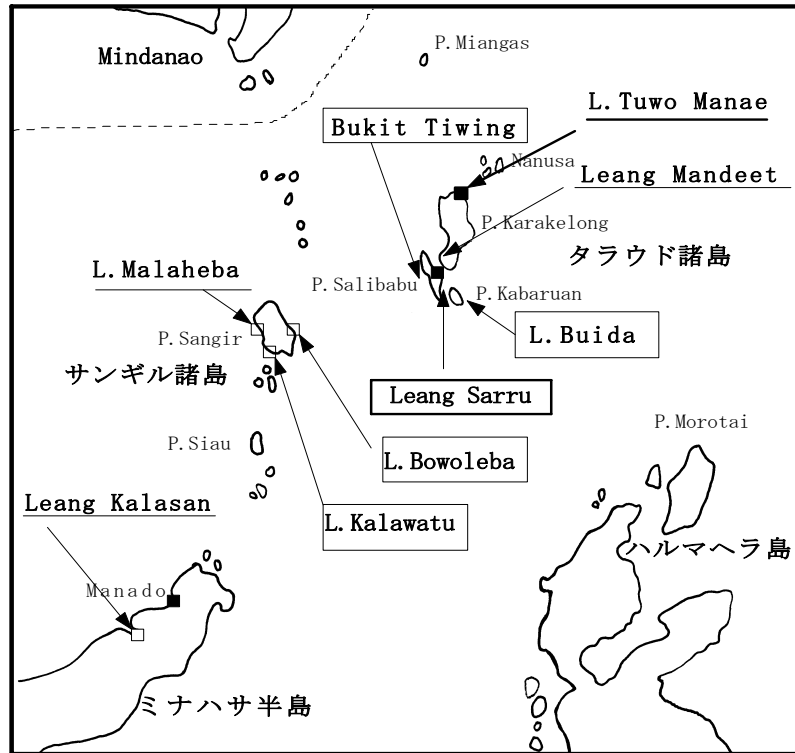


図1 サンギヘ・タラウド諸島と発掘遺跡

その目的は北スラウェシにおける過去の人類史の大まかなアウトライン（考古学用語でいう文化史）の検討と、各時代における人々の自然資源の利用に基づく生業史の復元である。またその一連の過程として、今年度は2006年7月10日～9月7日の期間、マナドの考古学支局に保管してある発掘資料の分析をおこなった。ここではまず、これまで共同調査として実施してきたサンギヘ・タラウド諸島での考古学調査とその成果を概略して紹介する。

### III. 発掘調査と分析報告

#### 1. リアン・サル遺跡（旧石器代、BP30,000～10,000年）

本研究で研究対象としてきた遺跡群のなかで時代的にもっとも古いリアン・サル遺跡では、合計で6㎡を発掘した。この遺跡は、1994年にインドネシア人考古学者ダウド・タンジーニョによって発見され、彼のオーストラリア国立大学での博士論文研究の一環として最初の発掘調査が実施された。リアン・サル遺跡は小さな石灰岩洞穴となるが、ダウドはこの洞穴内部で、1×1m四方のテストピットを2箇所発掘した。その結果、合計で3層におよぶ約70cmの堆積層が確認され、大量のチャート製剥片石器群と海産貝類が出土した。また炭素年代測定の結果、驚くことにその最下層が30,000～20,000年前に形成されたことが判明し、第二層

が20,000～10,000年間に形成された可能性が高いことが確認された。これに対し、第一層からは炭素年代が得られなかったが、出土遺物に土器片が混入している状況から新石器時代以降となる可能性が指摘されている [Daud 2001]。

このようにリアン・サル遺跡は、すでに小規模ながら発掘調査が実施された遺跡ではあったが、その発掘面積があまりに小さいという批判があったことから、筆者らによる再発掘調査では、ダウドによる調査の3倍の面積となる6㎡を発掘することになった。またダウドによる調査がおもに洞穴内部でのみ実施されたのに対し、再発掘調査では洞穴の内部から外部にかけてトレンチを開け、石器や貝類を中心とする遺物の空間的な分布状況を記録した。

発掘の結果、遺跡からは9,465点におよぶ剥片石器群と、3,417点の貝類遺存体が出土した。このうち、剥片石器群の分析としては、まず形態と製作段階に基づき、出土した資料を、母岩・石核(使用/未使用)・縦長剥片(使用/未使用)・横長剥片(使用/未使用)・チップ・チャックといったカテゴリーに分類した。その上でとくに重要となる縦長剥片、横長剥片、および石核のサイズや重量、および刃部の角度について計測したほか、特徴的な資料の図化をおこなった。

こうした石器の分析については、今回の調査でそのすべての分析を終了することはできず、その一部はまだ未分析のまま残っているが、全体的な印象としては東南アジア島嶼部の他の地域と同様に、一般的に「不定形剥片石器群」と呼ばれる石器インダストリーに属していることが指摘できる。ただし、リアン・サル遺跡出土の石器群にみられる大きな特徴として、30,000年前に遡る第三層から出土する石器群を含め、そのサイズが小型である点が挙げられる。また不定形とは言いつつも、ある程度のカテゴリーを設置できるような形態的な特徴をもつタイプが確認された。

さらに石器に使用された石材の岩石鑑定<sup>2</sup>の結果では、これらチャートと考えられていた石材の多くが、チャートに代表されるような堆積岩ではなく、火成岩の仲間となる珪化流紋岩、珪質流紋岩、変質流紋岩といった流紋岩や、珪化岩、珪化変質岩、輝緑岩からなることが判明した。この同定結果は、タラウド諸島が火山帯に位置している点や、土器の胎土分析で得られた結果と照らし合わせても妥当なものと考えられる。これら石材として利用された火成岩は、現在でもタラウド諸島の河川岸や海岸部で容易に採取することができるが、その産地は特定することができなかった。

また、遺跡の周囲や河川岸などで採取することができる石材の多くは、円礫で小粒のものが多くという特徴がみられた。したがって、遺跡から出土した石器や剥片の多くも、こうした遺跡の周囲や河川岸で得られた小型の火成岩を利用したことが、同時代の他遺跡と比べてかなりサイズの小さい石器や剥片群を形成させた可能性として指摘できる。ただし、その詳細なプロセスについては、剥片の剥離の方法や使用痕分析などからさらなる分析が求められる。これについては現在、東京大学の小田静夫氏と共同で、分析を継続している段階にある。

---

<sup>2</sup> 石材の岩石鑑定は、岩石学の専門家であるパリノサーバイ株式会社の五十嵐俊雄氏に依頼した。

一方、同遺跡から出土した貝類遺存体の分析については今年度の調査でほぼ完了することができた。同定分析の結果、リアン・サル遺跡からは合計で 53 種 (3,417 点/6 m<sup>2</sup>) の貝類のほか、1 種の甲殻類 (カニ; 種名不明) と 1 種の棘皮類 (パイプウニ *Heterocentrotus mammillatus*) の出土が確認された。これに 1994 年のダウドによる発掘で出土し、40 種に同定された貝類遺存体 (4,135 点/2 m<sup>2</sup>) を加えると、リアン・サル遺跡では、8 m<sup>2</sup> の発掘面積から合計で 7,552 点 (約 25kg) の貝類遺存体が出土したことになる。

ただし、1994 年の調査では岩陰内部のほぼ中央が発掘されたのに対し、2004 年の調査では、岩陰内部から外部にかけて発掘がおこなわれた。発掘地点との関わりからは、岩陰内部に貝類遺存体の出土量が集中する傾向があることが確認できた。実際、2004 年の調査においても貝類遺存体の出土量は、岩陰内部のほぼ中央に位置する C3 (1,872 点) が圧倒的に高く、ついで岩陰内部の周辺にあたる D2 (348 点)、D3 (492 点)、C4 (336 点) が続く。これに対し、岩陰の外部に位置する C5 (182 点)、C6 (187 点) からの出土量はかなり少ない。

本年度におこなった分析では、リアン・サル遺跡から出土したこれら貝類遺存体の分析を終了することができたが、その結果を踏まえた更新世紀の貝利用については次節でさらに詳しく論じたい。また発掘調査では年代測定の資料となる炭化物も多数得られたが、これらの炭化物については現在も年代測定中であり、遺跡の形成年代については現時点ではダウドによる発掘成果に基づいている。

## 2. リアン・ブイダ遺跡 (推定 BP1,000~400 年頃)

リアン・ブイダ遺跡はタラウド諸島の南西に位置するカバルアン島の西岸に位置する洞穴遺跡である。遺跡は現海岸線からわずか 3m の距離にあり、洞穴の開口部からは前面に海を見渡すことができる。洞穴の開口部は横幅が 8m、高さが 4m あり、開口部付近は十分に明るい。一方、洞穴の奥行きは 10m 以上あるが、内部へ向かうに連れ小さくなる。また洞穴の壁には波による侵食の跡が残されており、以前は海食洞穴であったことが推測される。

この洞穴遺跡での発掘調査は 2005 年 7 月に実施し、1×1m 四方のテストピットを合計で 11 箇所、発掘した。したがって、総発掘面積は 11 m<sup>2</sup> である。発掘の結果、最大で 1.2m の深さを持ち、3 層からなる堆積層が確認され、大量の土器片、貝類遺存体、動物遺存体、植物遺存体、石器類、鉄製品、陶磁器片などの出土が確認された。表 1 はこれら出土遺物のうち、現在も分析中の動物遺存体をのぞいた遺物群の出土量についてまとめたものである。炭化物も大量に出土しており、現在これらのサンプルから炭素年代を測定中である。

したがって、現時点ではまだ遺跡の正確な形成年代は得られていないが、出土遺物の中に 1 点ではあるが陶磁器片が含まれる点や、数点の鉄製品が出土している状況、それに出土した土器片の多くが、ベルウッド [1976] によってララングヌサ型と命名された交易時代から歴史時代にかけて利用された土器形式である出土状況から、この遺跡の形成年代を 1000 年~400 年前の時期と推定している。

出土した遺物の中でもっとも興味深いのは、8,509点と大量に出土した土器片と、21,487点出土した貝類遺存体である。このうち出土した土器片には、独特の文様からララングヌサ式と命名された有文土器片が409点確認され、下層から上層にかけて文様の特徴に緩やかな変化が認められた。詳細な土器の分析は現在も進行中であるが、これら出土した土器の形態に基づく分析から、紀元後1000年以降におけるタラウド諸島の物質文化（土器）に基づく編年（文化史）の作成が今後の作業として求められる。

さらに、土器片の胎土分析結果からは、土器に利用された土に混入している鉱物群の構成から、これらがタラウド諸島内で採取され、地元で製作されたことが確認された。ただし、分析対象となった土器片のいくつかは、次に紹介するサリバブ島の西岸に位置するブキット・ティウイン遺跡から出土した土器片の胎土構成に類似するものが確認された。こうした結果は、タラウド諸島の中でも島嶼間で土器の交換や流通がおこなわれていた可能性を示唆している。

表1 リアン・ブイダ洞穴遺跡の出土状況（個数）

テストピット	有文土器	無文土器	陶磁器数	チャート石	植物遺存体	クナリ石	鉄製品	貝類遺存体
A1	36	658	0	52	5	0	1	2441
B1	16	216	0	4	8	3	0	855
B2	16	200	0	28	24	0	0	1319
B3	8	145	0	4	0	0	0	1009
C1	19	240	0	15	4	1	0	1268
C2	6	147	0	8	6	0	0	411
D1	33	1431	0	55	32	3	0	3591
D-1	30	541	1	8	?	4	0	1373
E1	91	1808	0	84	54	11	0	3927
E-1	46	1317	0	30	7	4	0	2720
F1	108	1397	0	9	36	11	0	2573
<b>合計</b>	<b>409</b>	<b>8100</b>	<b>1</b>	<b>297</b>	<b>176</b>	<b>37</b>	<b>1</b>	<b>21487</b>

一方、大量に出土した貝類遺存体の多くは、リアン・サル遺跡と同様に海産貝類で占められ、最低でも117種に分類される貝類が確認された。このうちの数種は、現生標本の不足から同定にいたっていないものがあるが、全体として出土量の多い貝種としては、サザエの仲間となるリュウテン科の貝種、アマオブネ科の貝種、ヒザラガイ科の貝種などである。したがって、時代も場所も異なるものの、リアン・ブイダ遺跡においてももっとも利用頻度の高い貝種は、さきに検討したリアン・サル遺跡の場合と共通することが確認された。

リアン・ブイダ遺跡では、この他にも動物遺存体や植物遺存体出土している。しかし、その出土量は貝類遺存体と比べると極めて少なく、数百点を数えるに過ぎない。このうち動

物遺存体については現在も同定分析中であるが、現時点で確認されている動物群には、ブタ、トリ、魚類、ウミガメがある。また植物遺存体として確認されたのは、いずれもカナリウム（カンラン）の殻である。カナリウムは現在のタラウド諸島にも多く生育しており、その実は食糧や商品として、人々によって積極的に利用されている。

ただし、カナリウムの実は硬い殻によって覆われているため、実を取り出すにはこの殻を叩き割らねばならない。このため現在でも人々は、殻を割るための台となる大きめの石の上にカナリウムを置き、これをハンマーストーンとなる手ごろな石でもって叩き割って中の実を取り出している。さらにこの作業を繰り返すと、台として利用された石にはカナリウムサイズの研磨痕が形成されるが、遺跡からもカナリウムの殻と一緒に、こうした作業に使用されたと推察されるカナリウム型の窪みが形成された河石が 37 点出土した。

以上のような出土状況から、遺跡内ではおやつやスナックとしてカナリウムが頻繁に食されていた可能性が浮かび上がる。また遺跡が洞穴である点や、ほぼ海岸線上に位置する立地環境、遺跡の推定形成年代などを考慮すると、遺跡が定住的な居住空間としてよりも、季節的や一時的なキャンプ地や海に出る際のカヌー小屋のような空間として利用された可能性が高い。実際、遺跡からは漁錘と推定される土製の錘が数点出土したほか、骨製の銚先が出土している。年代測定の対象となる炭化物も大量に出土しており、これらの炭化物をもちいた年代測定を現在おこなっている最中である。

### 3. ブキット・ティウイン遺跡 (BP600~200 年)

ブキット・ティウイン遺跡は、タラウド諸島のサリバブ島西岸から 1km 内陸に位置する開地遺跡である。遺跡は標高 50m 前後の丘陵中腹から山頂にかけて広く分布し、表面調査では多数のララングヌサ型土器片や、ブタの顎骨、貝類などが表採された。この遺跡の発掘調査は 2005 年 7 月に実施し、1m×2m のトレンチ 1 箇所を発掘した。発掘の結果、1m 以上の深度をもつ 3 層からなる堆積層が確認され、ララングヌサ型土器をふくむ大量の土器片と動物骨のほか、貝類遺存体や骨製品が出土し、上層からは陶磁器片や鉄製品も出土した。出土した土器片は合計で 3594 点、陶磁器片は 61 点である。カナリウムと推測される植物遺存体も、それを食べた際に使用されたと考えられる研磨痕のある石製品とともに出土している。

出土遺物として下層からもララングヌサ型土器が出土した点や、上層から陶磁器片や鉄製品が出土したことから、遺跡の形成年代は 12 世紀以降と推測された。実際、下層から出土した炭化物より得られた炭素年代値も、BP539±81 年（較正暦年 AD1280-1520 年）であり、この遺跡が 13~15 世紀頃より形成されたことが確認された。また、上層から出土した陶磁器片の多くは、明代末から清代期以降の質の低い中国製陶器で占められていた。こうした出土状況は、遺跡の上層がより新しく 16~18 世紀頃に形成された可能性を示唆している。

ブキット・ティウイン遺跡から出土した遺物群の中でもっとも興味深いのは、ララングヌサ型土器をはじめとする土器片と、大量に出土した動物遺存体である。このうちララングヌサ型土器片は、前述したリアン・ブイダ遺跡からも大量に出土しており、胎土分析の結果か

ら両者の共通性も確認された。ララングヌサ型土器は、さらにミンダナオ島南岸域 [Spoher 1973] やマルク諸島のハルク島でも表採されており [Soegondho 1996]、同時期にタラウド諸島の周辺域でも広く普及した土器形態である可能性が指摘される。したがって、今後の分析においてはリアン・ブイダ遺跡から出土した土器片との比較の視点のみでなく、スラウェシ北部、ミンダナオ南部、マルク諸島を含めたより広い視野からの研究が求められる。

一方、大量に出土した動物遺存体の多くは、ブタ・イノシシ類に代表される Sus 属のものである。今後の分析では、これら遺存体の同定を進めると同時に、Sus 属に同定される骨が家畜化の痕跡をのこすブタなのか、野生種と考えられるイノシシになるのかを検討していく必要がある。このほかに貝類遺存体も出土しているがその量は他の遺跡と比べるとそれほど多くない。こうした動物遺存体の出土状況は、ほぼ同時代に形成されたと推測される前述のリアン・ブイダ遺跡と比較すると、遺跡の立地環境による違いを明確にできる可能性がある。ブキット・ティウイン遺跡から出土したこれら動物遺存体の分析は、現在も進行中であり、その成果については近いうちに発表する予定である。

#### 4. リアン・ボラレバ遺跡 (推定 BP300 年以降)

2005 年度の調査ではタラウド諸島だけでなく、サンギへ諸島の中心地となる大サンギへ島でも踏査と発掘を実施した。しかし大サンギへ島で、遺跡の確認を目的とておこなわれた踏査では、良好な遺跡を発見することができなかった。一般的に考古学の遺跡踏査では、表土上に分布している遺物の種類や量から、遺跡の位置や分布を特定していくが、大サンギへ島ではその過程で重要な要素となる表採品がほとんど確認されなかった。その要因として、現在も活火山が活動し、平地が極めて限られている大サンギへ島の土砂堆積の量や速度との関係が指摘できるかもしれない。

いずれにせよ、大サンギへ島ではかなりの時間をかけて踏査したにもかかわらず、良好な遺跡が発見できなかったが、その中で唯一、数点の土器片と陶磁器片を採取できたのが大サンギへ島の東岸に位置するリアン・ボラレバ遺跡であった。この遺跡は、沿岸から 500m ほど内陸にある標高 100m の丘陵中腹に位置する岩陰遺跡である。筆者らはここで試掘を実施することとし、1m×1m のテストピットを合計で 5 箇所発掘した。

その結果、堆積層は 2 層で、深い地点では 1m 以上の堆積が確認されたが、浅い地点では岩盤と考えられる岩によって覆われており、それ以上の発掘ができなかった。出土遺物は、数点の土器片、陶磁器片のほか、ガラスビーズが出土したが、動物遺存体や貝類遺存体などの自然遺物は出土しなかった。炭化物も収集されたが、その年代測定は分析中であり、年代値はまだ出されていない。しかし、出土した陶磁器片のすべてが清代以降のものである状況から、17 世紀以降に形成された遺跡であると考えている。

また遺跡から動物や貝類遺存体がまったく出土しなかった状況や、ガラスビーズが出土した点などを考慮すると、遺跡が居住を目的として利用されたのではなく、むしろ何らかの儀礼や埋葬を目的として利用された可能性がある。サンギへ・タラウド諸島の伝統的な埋葬形



態は風葬で、海を見渡すことのできる高台や海岸洞穴などが遺骨を安置する場として利用されてきた歴史をもち、リアン・ボロレバ遺跡を形成する岩陰の頂部にも陶磁器と一緒に安置されている人骨が確認された。

したがって、リアン・ボロレバ遺跡は人間活動の痕跡を残す遺跡として認識することはできるが、この遺跡は筆者ら調査チームが主な対象としている居住遺跡とは考えられず、サンギへ諸島では離島域も含めてさらなる遺跡の踏査と、居住遺跡の発見が課題として残されている。また遺跡から出土した土器片の中には、ララングヌサ型土器に類似する文様をもつ土器片が含まれており、これについてはタラウド諸島から出土している土器片との比較をふまえた分析が求められる。

#### IV. 更新世後期におけるタラウド諸島の海洋資源利用

現在、北スラウェシ州でもっとも古い人類の痕跡を留める遺跡は、タラウド諸島に位置するリアン・サル遺跡となり、スラウェシ島のミナハサ半島では、10,000年を遡る更新世期の遺跡がまだ発見されていない。したがって、10,000年より前の更新世後期における人々による海洋資源利用の痕跡を残す遺跡は、現時点ではリアン・サル遺跡のみということになる。そこで本稿では、本年度の調査で分析を終了することができたリアン・サル遺跡出土の貝類遺存体から、この遺跡が形成された更新世後期における人々の海洋資源の利用と変遷について検討したい。

まず、出土した貝類遺存体のうち、いずれの発掘調査においても出土個数が高かった貝種は、アマオブネ科の数種 (*Nerita lineate* イトマキアマガイ、*Nerita undata* アラスジアマガイ、*Thiostyra albicilla* アマオブネ)、リュウテン科の数種 (*Turbo marmoratus* ヤコウガイ、*Turbo sparverius*、*Turbo stosus* マルダガサザエ)、ニシキウズ科の数種 (*Trochus maculatus* ニシキウズ、*Trochus niloticus* サラサバティ、*Trochus erythraeus*) などであった。このうち出土数をもっとも高かったのはアマオブネ科に属する貝種であるが、これらはサイズの小さい貝種で、肉量としてはそれほど大きくない。むしろ肉量という点でもっとも利用されていた貝種としては、サザエの仲間となるリュウテン科とニシキウズ科に属する貝種があげられる。

表2は、2004年の発掘調査で出土量の多かった3つのテストピット (D2, D3, C3) から出土した貝類遺存体の出土状況を種別に整理したものである。全体としては、BP20,000年から10,000年頃と推定される第2層において貝類遺存体の出土量をもっとも多く、その出土種も多種にわたる。一方、BP30,000年から20,000年頃と推定される第3層での出土量はより少ないが、最低30種の貝類と1種の甲殻類 (カニ)、それにパイプウニが出土している。

これらのうち、出土量が多い貝種はアマオブネ科のイトマキアマガイ、リュウテン科の数種 (ヤコウガイ、チョウセンサザエ) のほか、ツタノハガイ科やヒザラガイ科の出土量が目立つ。また全体の数量は少ないが、陸生種となるオカミミガイ科のマダラシイノミガイ、ミミガイ科のマアナゴなどの出土量が他層と比べて高い。リュウテン科に属するヤコウガイや

チョウセンサザエ、アマオブネ科に属するイトマキアカガイなどは潮間帯よりもやや深い水域に生息する傾向があるが、ツタノハガイ科やヒザラガイ科は潮間帯の岩礁域に主に生息する貝種である。また、第3層では陸生種の出土率が第2層に比べて高くなる傾向が指摘できる。

表2 リアンサル遺跡 (D2/D3/C3) から出土した貝類遺存体の出土状況

番号	腹足綱(海産)	和名	学名	1層	2層	3層	数量
1	アマオブネ科 Neritidae	不明	<i>Nerita articulata</i>	209	424	217	850
		アマオブネ	<i>Thliostyra albicilla</i>	105	77	11	193
		不明	<i>Neritia lineata?</i>	13	43	8	64
		フトスジアマガイ	<i>Ritena costana</i>	67	291	194	552
		マルアマオブネ	<i>Ritena squamulta</i>	17	13	2	32
		アマガイモドキ	<i>Neritopsis radula</i>	1	0	1	2
		6	0	1	7		
2	リュウテン科 Turbinidae	リュウテン科の蓋	<i>Turbo sp</i>	169	260	137	566
		キングチサザエ	<i>Turbo chrysostomus</i>	161	218	127	506
		マルサザエ	<i>Turbo stosus</i>	0	7	2	9
		コシダカサザエ	<i>Turbo stenogyrus</i>	4	14	3	21
		不明	<i>Turbo sp</i>	2	0	0	2
		不明	<i>Turbo marmoratus</i>	2	2	0	4
		0	19	5	24		
3	ニシキウズ科 Trochidae	ギンタカマハ	<i>Tectus pyramis</i>	117	154	19	290
		サラサバティ	<i>Trochus niloticus</i>	8	1	0	9
		キサゴの1種	<i>Umbonium spp.</i>	28	1	0	29
		ニシキウズ	<i>Trochus maculatus</i>	65	2	1	68
		16	150	18	184		
4	ユキノカサ科 Acmaeidae	ウノアンの1種	<i>Patelloida sp.</i>	1	77	92	168
		不明	<i>Acmaea sp.</i>	1	2	0	3
		0	75	92	167		
5	ヒザラガイ科 Chitonidae	クサズリガイ目	<i>Acanthopleura/Liolophura</i>	19	110	77	206
		19	110	77	206		
6	イトマキガイ科 Fascioliariidae	ナガサキニシキミナ	<i>Latirus nagasakiensis</i>	82	49	4	135
		ミガキナガニシ	<i>Fusinus undatus</i>	81	38	1	120
		イトマキボラの仲間	不明	1	3	2	6
		0	8	1	9		

7	オカミミガイ科			29	6	17	52
	Ellobiidae	マダラヒラシイノミガイ	<i>Pythia panthrina</i>	29	6	17	52
		イ					
9	スイショウガイ科			8	4	0	12
	Strombidae	インドマガキガイ	<i>Strombus decorus</i>	7	3	0	10
		スイショウガイ科の1種	<i>Strombus</i> sp	1	0	0	1
		スイショウガイ科の1種	<i>Strombus</i> sp	0	1	0	1
10	アッキガイ科			14	19	31	64
	Muriciadae	レイシガイの仲間	不明	14	19	31	64
12	タカラガイ科			17	9	5	31
	Cypraeacea	ホシダカラ	<i>Cypraea tigris</i>	5	2	2	9
		ハナマルユキ	<i>Cypraea caputserpentis</i>	11	3	3	17
		不明	<i>Cypraea nucleus</i>	0	4	0	4
		不明	<i>Cypraea scurra</i>	0	2	1	3
		ヒメホシダカラ	<i>Cypraea lynx</i>	1	0	0	1
14	シャコガイ科			20	3	0	23
	Tridacnidae	シラナミ	<i>Tridacna maxima</i>	5	1	0	6
		ヒメジャコ	<i>Tridacna crocea</i>	14	1	0	15
		シャゴウ	<i>Hippopus hippopus</i>	1	1	0	2
15	ミミガイ科			2	5	30	37
	Haliotidae	マアナゴ	<i>Haliotis ovina</i>	2	5	30	37
16	カブラガイ科			7	16	2	25
	Rapidae	ミズスイの1種?	<i>Latiaxis armatus?</i>	7	16	2	25
17	イモガイ科			5	8	2	15
	Conidae	イモガイ科の1種	<i>Conidae</i> sp.	5	8	2	15
18	タケノコガイ科			9	0	3	12
	Terebridae	タケノコガイ科の1種	<i>Terebra</i> sp.	9	0	3	12
19	オニツノガイ科			0	1	0	1
	Cerithidae	オニツノガイ	<i>Certhium nodulosum</i>	0	1	0	1
20	コハクガイ科			23	15	15	53
	Zonitidae	不明	<i>Tronchomporpha lardea</i>	23	15	15	53
21	陸生種			21	1	11	33
	Helicanonidae	不明	不明	21	1	11	33

斧足綱(二枚貝類)		和名	学名	1層	2層	3層	数量
22	アシガイ科			9	6	0	15
	<b>Psammobiidae</b>	リュウキュウマスホウ	<i>Asaphis deflorata</i>	9	6	0	15
23	マルスダレガイ科			3	2	0	5
	<b>Veneridae</b>	ハマグリの仲間	不明	2	2	0	4
		ハマグリの仲間	不明	1	0	0	1
24	フデガイ科			5	2	0	7
	<b>Mitridae</b>	不明	不明	5	2	0	7
25	イガイ科			1	1	0	2
	<b>Mytridae</b>	ハブタエタマエガイ	<i>Musculus laevigatus</i>	1	1	0	2
26	バカガイ科			1	1	2	4
	<b>Mactridae</b>	バカガイ	<i>Mactra chinensis</i>	1	1	2	4
27	イタボガキ科			1	0	0	1
	<b>Ostreidae</b>	不明	不明	1	0	0	1
28	フジツガイ科			1	0	0	1
	<b>Cymatidae</b>	不明	不明	1	0	0	1
29	未同定(二枚貝)		?	3	27	47	77
<b>その他</b>							
	<b>その他</b>	<b>和名</b>	<b>学名</b>	<b>1層</b>	<b>2層</b>	<b>3層</b>	<b>数量</b>
30	甲殻綱	不明	不明	2	29	7	38
	カニ類			2	29	7	38
31	棘皮動物			18	20	4	42
	<b>ナガウニ科</b>	<b>パイプウニ</b>	<i>Heterocentrotus</i> <i>mammillatus</i>	18	20	4	42

これに対し第2層では、陸生種やツタノハガイ科の出土量は減少する一方、その他の貝種はいずれも急増する。第3層より出土量が多かったアマオブネ科やリュウテン科の出土量も増加し、貝種の多様性も増加している。アマオブネ科ではアマオブネやアラスジアマガイの出土量が増え、リュウテン科では大型種となるヤコウガイの出土が目立つ。さらに第2層において特徴的なのは、沿岸外縁域に生息するニシキウズ科のニシキウズやイトマキガイ科のナガサキニシキミナ、カタベガイ科のリュウキュウカタベイの出土量が急増する点にある。特にその出土量はBP20,000年前後の炭素年代が得られている第2層の下層（地表から30-40cm）に集中するが、BP10,000年前後の炭素年代が得られている上層（地表から20-30cm）にかけての出土量は再び減少する。

また、カニやパイプウニの出土量が増加するのも第2層である。一方、第2層から出土す

る貝には小型のものが増加する傾向があり、これはダウドによる貝類遺存体の分析においても確認されている [Daud 2001: 260]。こうした出土状況は、貝類資源への利用頻度の増加によって、肉量が多く利用価値の高かった大型の貝類を獲りすぎたために、大型サイズの貝類が減少した可能性を連想させる。

最後に土器の出土が確認され、第2・3層と比べ明らかに新しい時代に廃棄された遺物が混じる第1層における貝類遺存体の出土状況を、比較の目的から簡単に触れておきたい。すでに指摘したように第1層からはまだ炭素年代が得られていないが、出土した貝類遺存体の年代はBP10,000年前後まで遡る可能性がある。いずれにせよ、第1層の形成年代が完新世期となる可能性は高い。貝類遺存体の出土状況も第2層や第3層と比べてやや異なっている。例えば、更新世期に出土量が多かったツタノハ科やヒザラガイ科などの貝類は第1層からはほとんど出土しない。

一方、オカミミガイ科のマダラシイノミガイを含む陸生種の出土量はふたたび増加する。ただし、第2層や3層でも出土率が最も高かったアマオブネ科やリュウテン科の貝種は、第1層での出土率も依然として高い。このほか、第1層からの出土量が多い海産貝類として、イトマキガイ科、タカラガイ科、シャコガイ科、タケノコガイ科があげられる。ニシキウズ科では、ニシキウズの出土量は激減するが、代わりにキサゴ類やサラサバティなどの出土量が高くなる。これらの科に属する貝種は潮間帯よりも深い水域を好み、種によってその生息範囲は異なるが、第2層や第3層からはほとんど出土しておらず、更新世後期にはそれほど重要な貝種ではなかった可能性が高い。

リアン・サル遺跡から大量の貝類遺存体が出土したことは、北スラウェシに位置するタラウド諸島では、約30,000年前に遡る後期更新世期から貝を中心とする海産資源が、人々の生活にとって重要な生産資源となってきたことを示唆している。特に海産貝類としてタラウド諸島で後期更新世より重要度が高かった貝種として、サザエの仲間となるリュウテン科、ニシキウズ科、それにアマオブネ科があげられる。これらの貝種は、完新世期以降においてもタラウド諸島では重要な貝種であったことが、リアン・サル遺跡の第1層の出土状況からも確認された。

類似した出土傾向は、新石器時代遺跡となるリアン・トゥオ・マナエ岩陰遺跡 [Bellwood 1975; Daud 2001] や、より新しい交易時代の遺跡となるブキット・ティウイン遺跡 [Ono 2004; Santoso 2005] などでも確認されている。したがって、これらの貝種は後期更新世以来、かなり新しい時代に至るまで、タラウド諸島においてもっとも頻繁に獲得され、利用されてきた貝類と考えられる。

その一方、貝類の利用状況は、更新世後期から完新世期における約20,000年の間に変化があったことも、出土した貝類遺存体の分析によって確認された。まず、BP30,000年～20,000年間の時代には、ツタノハやヒザラガイなどの潮間帯の岩礁息に生息する貝種や、マダラシイノミガイなどの陸生種への依存度が高かった。潮間帯以下の海域に生息する貝種では、ミミガイ科のマアナゴなどの水深10m以上の比較的浅い海域に生息する貝種が圧倒的に多く

(図2)、より深い海域にも生息する貝種の出土量はかなり低い。

最終氷河期がまだピークに達していなかったこの時期、気候はなお温暖で海面の高さも最終氷河期のピーク時よりは高かったと考えられる。したがって、遺跡から海岸線までの距離もより近かったと推測されるが、人々による貝類資源の利用圏は、基本的には沿岸の浅瀬周辺に集中するものであった。

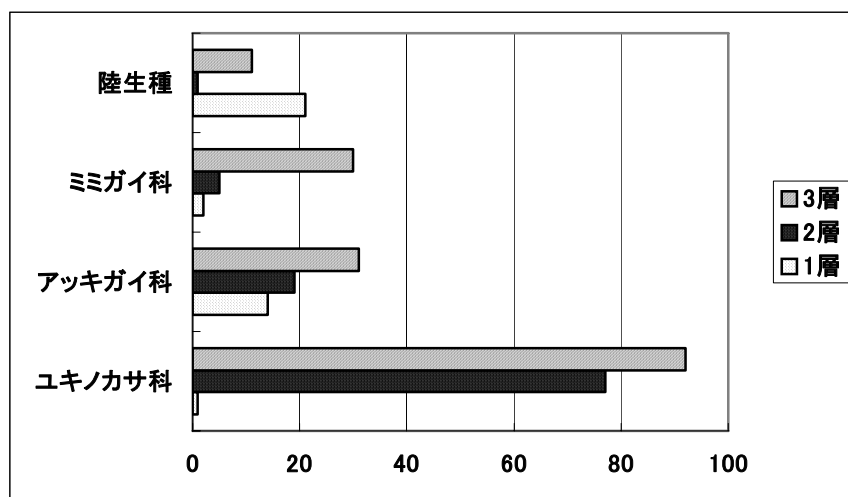


図2 第3層に出土量の多い貝類 (BP30,000年～20,000年)

これに対し、最終氷河期が最高期を迎えるBP20,000年頃には遺跡での貝利用はもっとも活発になり、かつ多様化する傾向を示している。主に出土する貝種では、第3層に引き続きアマオブネ科やリュウテン科の出土量をもっとも高いが、沿岸外縁域に生息するニシキウズ科のニシキウズやイトマキガイ科のナガサキニシキミナ、カタベガイ科のリュウキュウカタベイなどの増加も目立つ(図3、図4)。

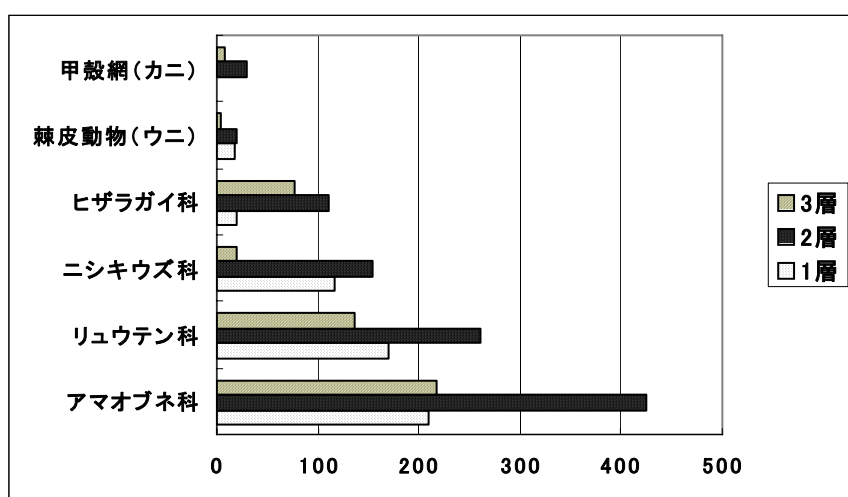


図3 第2層に出土量の多い貝類 (BP20,000年～10,000年)

最終氷河期を迎える BP20,000 年頃からは寒冷化が強まり、海面がより低下したと推定される。したがって、遺跡から海岸線までの距離がより遠くなった可能性が高い。それにもかかわらず、遺跡における貝類遺存体の出土状況は、人々による貝利用がより活発化し、その採集範囲も拡大した可能性を示唆している。したがって、BP20,000 年以降、人々の貝類への依存度がより高まったと考えられる。その要因としては、寒冷化による他の食料資源量の低下や人口増加などが推測されるが、明確な要因は現時点では指摘できない。いずれにせよ、人々が利用できた食料資源量と何らかの相関性をもっている可能性は高い。

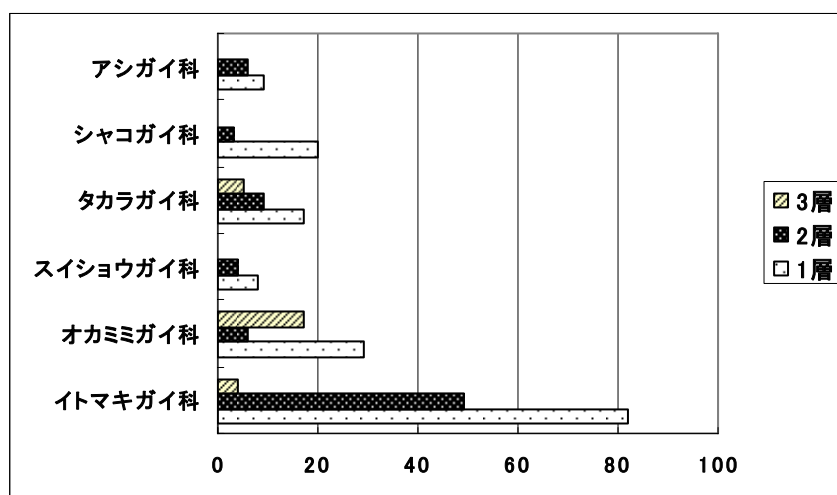


図4 第1層に出土量の多い貝類 (BP10,000 年以降?)

しかし、同じ第2層でもその上層域においては、貝類遺存体の出土量は減少する。同様の傾向は完新世初期と推測される第1層においても確認された。さらに第1層では、ニシキウズ科のニシキウズが減少する一方で、同科のサラサバティは増加しており、他にイトマキガイ科、シャコガイ科やタカラガイ科などの貝種も増加した。またオカミミガイ科などの陸生の貝種も第2層に比べて増加する傾向がみられた (図4)。

ただし、全体としての出土量は第2層に比べて少ない。これらの状況は、完新世期以降においては貝類への依存度はやや低下したものの、その採集範囲や利用する貝種の多様化はより拡大したことを示唆している。BP15,000 年頃より完新世期にかけて気温はふたたび温暖化し、海面も上昇した。貝類遺存体の出土量が第2層上層より減少する要因の一つとして、温暖化にともなう他の食料資源量の増加などが考えられるが、人々の採集範囲が拡大している点は、更新世後期に相当すると考えられる第3層における状況と比較すると対照的といえよう。

しかし、この遺跡からは海産貝類は大量に出土したものの、魚骨や獣骨といった他の動物資源はまったく出土が確認されなかった。その実際の原因は不明であるが、要因の一つとして、豊富な貝類資源に対する沿岸魚類資源の小規模性が考えられる。実際、現在においても

タラウド諸島の沿岸域は、浅いサンゴ礁リーフや内湾が未発達で、基本的には沿岸から近距離で水深が深くなる海底環境をもっている。同じような傾向はサンギへ諸島や、スラウエシ島北部の沿岸域にも見られるが、こうした沿岸環境において魚類資源を利用するには、やや大型の網や釣り漁といった高い漁撈技術が必要となる。これに対し、貝類資源は基本的に採集活動でも容易に獲得が可能であり、その結果としてタラウド諸島では、海産資源として貝類資源への依存が高まった可能性があるのではないだろうか。

ところで、タラウド諸島にリアン・サル遺跡が形成されていた同時期に、その周辺地域で形成された後期更新世遺跡には、スラウエシ島南部のウル・リアン遺跡（BP30,000年～12,000年）、ボルネオ島サバ州東岸域の内陸15～20kmに位置するティンカユ遺跡群（BP28,000年～17,000年）、ハゴップピロ岩陰遺跡（BP17,000年～12,000年）、それにマダイ洞穴遺跡群（BP11,000～7,000年）などがあげられる。これらの遺跡群は、海面高が現在よりも低かったと想定される更新世後期には、海岸までの距離が50kmほど離れていたと推測されている[Bellwood 1988]。そこで、本報告では最後にスラウエシ島とその周辺域というより広い視点から、この時代の海洋資源利用について検討し、総括としたい。

## V. 更新世後期から完新世におけるスラウエシ島とその周辺域の海洋資源利用

リアン・サル岩陰遺跡の第3層とほぼ同時期と考えられるスラウエシ南部のウル・リアン遺跡は、現在のマカッサル沿岸域から20kmほど内陸に位置する石灰岩洞穴である。しかし、氷河期に相当する更新世後期においては、海面の低下によりこの遺跡は当時の海岸線からさらに遠方に立地していた可能性が高い。そうした遺跡の立地環境を反映してか、この遺跡から出土した貝類遺存体の多くは淡水性の貝種で占められており、海産資源の利用は確認されていない[Glover 1976]。

同じくボルネオ島のティンカユ遺跡は開地遺跡であるが、更新世後期にはその近隣に内陸湖が存在していたことが地質調査で確認されており、遺跡が湖畔に形成されていた可能性が高い。しかし、この遺跡からは多数のチャート製剥片石器群（両面加工石器を含む）のほかは、貝類遺存体を含め動植物遺存体がまったく出土しておらず、過去の食生活を考古学的に復元するには限界がある。遺跡が湖畔に面していたという立地環境から推測するならば、遺跡で利用されたであろう貝類や魚類の多くは湖や川に生息していた淡水種であった可能性が高い。

これに対し、リアン・サル岩陰遺跡の第2層とほぼ同時期と考えられるボルネオのハゴップピロ岩陰遺跡からは、多くの貝類遺存体が出土しているが、これらはいずれも淡水性の貝類であり、遺跡の周辺を流れる河川域で採集されたものと考えられる。ただし、ハゴップピロ岩陰遺跡からは海産貝類は1点も出土しておらず、遺跡が海岸から50km近く離れていた当時、遺跡で海産貝類が頻繁に利用されることはなかった。

ハゴップピロ洞窟遺跡は、BP10,000年以降には遺跡が放棄されるが、その反対に同じく石



灰岩性丘陵に形成され、より海岸線に近いマダイ洞窟遺跡群はBP10,000年以降より利用が開始された。この時期はすでに完新世初期に相当するが、遺跡からはハゴップピロ岩陰遺跡と同様に多くの淡水産貝類が出土したほか、マングローブ域などに主に生息する汽水産の貝類も出土が確認されている。

マダイ洞窟群遺跡の形成期は、リアン・サル岩陰遺跡の第1層と同時期となる可能性が高いが、この時期になると人々の採集活動範囲がより拡大することが、両遺跡の出土状況から指摘できる。ただし、完新世期においても海岸線から約15km内陸に位置するマダイ洞窟群遺跡では、やはり海産貝類の出土は確認されていない。これら遺跡群の海岸線からの距離と出土状況を考慮するなら、更新世後期における人々の貝利用は、基本的には遺跡周辺域に集中しており、完新世期へと向かうにつれて、しだいにその採集範囲や利用する貝種の幅が拡大する傾向がみえてくる。

したがって、更新世後期に遡る遺跡で、海産貝類の出土が確認されているのは、現時点では周辺地域を含めてもリアン・サル遺跡しか存在していない。いずれにせよ、これらの遺跡群における出土状況は、更新世後期における人々の資源利用圏は遺跡の周囲に限られており、海岸線から数10km離れた内陸域では、海産資源の利用がほとんど見られなかった可能性を示唆している。その一方で、リアン・サル遺跡のように、海岸線から比較的近い距離に立地した遺跡では、貝類資源を中心に積極的な海産資源の利用がおこなわれていたと考えられる。

なお、更新世後期とその後の完新世期における人々の貝の利用には、もう一つ大きな変化が指摘できる。一般的に人間による貝の利用には、大きく(1)貝の身となる肉の部分を生食(副食)として利用する場合と、(2)貝殻を道具として利用する場合の2つが想定される。しかし、(1)食糧として利用され、廃棄されたと想定される貝類遺存体は、リアン・サル岩陰遺跡のように更新世期にまで遡る旧石器時代遺跡からも出土が確認されるが、(2)道具として加工された貝製品は、完新世期以降に形成された遺跡群からしか出土が確認されていない。

実際、タラウド諸島においてはリアン・サル岩陰遺跡からは貝製品はまったく出土が確認されなかった。これに対し、新石器時代遺跡以降の遺跡群からイモガイ製の腕輪などの貝製品が僅かながら出土しており、シャコガイ製貝斧の存在もいくつか確認されている。そのもっとも古い年代は、タラウド諸島の離島域に位置する完新世遺跡から出土したBP4,310±50年(OZD-771)の年代が得られている打製のシャコガイ製貝斧である[Daud 2001: 203]。

いずれにせよ、タラウド諸島においては貝類資源の道具としての利用の痕跡は、更新世遺跡からはまだ確認されておらず、貝製品はすべて完新世遺跡から出土している。とくに時代がより新しくなるにつれてその種類も多様化する傾向がある。一方、食料としての貝資源の利用は、現在のところもっとも古い人類の痕跡が現れる更新世後期より活発におこなわれていたことが、リアン・サル岩陰遺跡の発掘によって明らかとなった。

また新石器時代遺跡であるリアン・トゥオ・マナエ岩陰遺跡、より新しい時代に形成されたリアン・ブイダ遺跡や、ブキット・ティウイン遺跡などからも貝類遺存体は大量に出土し

ており、アマオブネ科やリュウテン科、ニシキウズ科が主流となる状況は共通して確認されている。これらの状況を考慮するなら、タラウド諸島の沿岸環境は、これらの貝種に適した生息条件を満たしており、これらの貝種が更新世後期より近年にいたるまで人々にとって重要な食料資源となってきたことを指摘できる。

## VI. おわりに

東南アジア島嶼部の後期更新世遺跡からは、これまで海産貝類の大量出土が確認されてこなかった。これに対し、後期更新世に形成されたリアン・サル岩陰遺跡における貝類遺存体の出土状況は、その要因が遺跡の立地環境と強く相関することを示唆している。広大なスンダ大陸が形成されていたこの時代においても、海岸近くに形成された遺跡群では、おそらく積極的な海産資源の利用がおこなわれていたに違いない。

しかし、残念ながらそれら遺跡群の多くが、現在は海面下に位置しており、考古学的な調査や発見が難しい状況にある。こうした状況に対し、更新世紀から完新世期にかけて一貫して海岸近くに立地してきたと推測されるリアン・サル岩陰遺跡の発掘調査は、すでに更新世後期よりこの地域に居住してきた人々が、十分な水域適応を達成していたことを端的に物語っているといえよう。今後、北スラウェシ州で最も古い人類遺跡となるリアン・サル遺跡は、スラウェシのみでなく、その周辺域もふくめた東南アジア島嶼部においても考古学的に重要な遺跡として認識されていくであろう。

なお、本稿では今年度で分析が終了したリアン・サル遺跡の貝類遺存体を中心に報告したが、今後の研究においてはその他の遺跡群から出土した遺物群の分析のほか、本稿では紹介できなかった、現代のタラウド諸島やミナハサ半島沿岸域における人々の海洋資源の利用についてデータの収集と分析を進めていく予定である。

ちなみに現代の海洋資源利用を対象とした研究として今年度を実施した調査としては、北スラウェシ州ミナハサ半島の南岸に位置するトンバック村(2006年8/15~16)と、ミナハサ半島北部のマナド近海に位置するナイン島のバジャウ村(2006年8/18~21)における短期間のジェネラルサーベイが挙げられる。これは、本科研のメンバーである東洋大学の長津一史氏、およびマナド市にある海洋地域文化研究センター(Maritime & Indigenous Culture Research Center)のアレックス・ウラエン氏との共同調査として実施したのものである。このうち筆者は、両村における現在の漁撈活動の内容、漁具、漁船、漁獲の販売形態や販売経路、魚名の現地語にかんする聞き取りを中心におこなった。

またナイン島では、村民による近海でのマグロ釣り漁に1回だけ参加することができた。外洋域にいればマグロやカツオなどのサバ科魚類の漁獲が可能になるとはいえ、これまで筆者が調査してきたマレーシア・ボルネオ島に居住するバジャウ(サマ)の漁撈では、村民があえて外洋域に出漁することは全くみられなかった[小野2005; 2006a; 2007a]。

こうしたボルネオ側のバジャウによる漁撈と比較すると、ナイン島をふくめ北スラウェシにおけるバジャウ集団の漁撈には差異が認められる。今後の調査では、こうした差異を生ん

だ具体的な背景を探るとともに、北スラウェシにおけるバジャウの漁撈にかんする長期間の観察に基づく定量的データの収集を予定している。

## VII. 付記

本稿で報告したデータのうち、リアン・サル遺跡から出土した貝類遺存体の分析結果については小野 [2007b]、ブキット・ティウイン遺跡から出土した土器および陶磁器片については小野 [2006b] において、成果の一部を公表している。

## 謝 辞

スラウェシにおける過去から現代の海洋資源利用について考古学という方法論からアプローチしてきた筆者を、研究協力者として本科研に参加させて下さった田中耕司先生、並びに刺激的な研究会を通して有益なコメントやアドバイスを下さったメンバーの方々に感謝申し上げます。

本稿においてもその成果の一部を紹介したサンギヘ・タラウド諸島での発掘・踏査調査は、インドネシア考古学研究センター所長のトニー・ジュビアントノ博士、マナド考古学支局のサントソ・ソエゴンド博士、およびスタッフの方々からの惜しみない御協力によって実現できた。ブキット・ティウイン遺跡出土の陶磁器片の同定においては上智大学の田畑幸嗣氏にお世話になり、同遺跡から出土した土器片の胎土銫鉍物分析においてはパリノサーベイ株式会社の千葉博俊氏に、またリアン・サル遺跡から出土した貝類遺存体の分析においては関西外国語大学の片岡修氏ご協力いただいた。お世話になった全ての方々に記して謝意を申し上げます。なお、インドネシアでの考古学調査は平成 16・17 年度文部省科学研究費補助金・特別研究員奨励費の一部を利用して行われた。

## 参考文献

Bellwood, P. S.

1976. Archaeological research in Minahasa and Talaud islands, Northern Indonesia. *Asian Perspectives* 19: 240-288.

1988. *Archaeological Research in Southern Sabah*. Sabah Museum Monograph 2, Kota Kinabaru: Sabah Museum

Daud, T.

2001. *Islands in between: Prehistory of the Northeastern Indonesian Archipelago*. Ph.D. Dissertation, The Australian National University.

2005. Long-continues or short-occasional occupation? The human use of Leang Sarru rockshelter in the Talaud Islands, North eastern Indonesia. *Bulletin of Indo Pacific Prehistory Association* 25: 15-19.

Glover, I. 1976. Ulu Leang cave, Maros: A preliminary sequence of post-Pleistocene cultural development in South Sulawesi. *Archipel* 11: 113-54.

Ono, R. 2004. An archaeological and ethno-archaeological research on settlement and subsistence

patterns at Sangihe-Talaud Islands, North Sulawesi Province. Quarterly Report submitted to Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia, Jakarta.

小野林太郎

- 2005. 『セレベス海域の生計戦略と海洋資源利用－民族考古学アプローチからの地域研究の試み』博士論文 (上智大学大学院)
- 2006a. 「変わる“生計活動”と変わらぬ“資源利用”－東南アジアの「漂海民」の場合－」印東道子 (編) 『環境と資源利用の人類学 - 西太平洋島嶼の生活と文化 - 』東京: 明石書店, pp105-126.
- 2006b. 「土器・陶磁器から見たセレベス海域の交易・歴史時代: 交易ネットワーク・複合社会の発展過程に関する歴史考古学的試論」『上智アジア学』23号: 179-200.
- 2007a. 「ボルネオ島サマ人による漁撈の「近代化」と「伝統」: 陸サマと海サマによる漁撈の比較をとおして」『国立民族学博物館研究報告』31(4): 497-579.
- 2007b. 「後期更新世期のセレベス海域における貝利用: インドネシア・タラウド諸島の事例から」青柳洋治先生退職記念論集編集委員会 (編) 『地域の多様性と考古学: 東南アジアとその周辺』東京: 雄山閣, pp321-334.

Ono, R. and S, Soegondoh. 2004. A short report for the re-excavation at Leang Sarru site, Talaud Islands. *Jejak-Jejak Arkeologi* No.4: 37-50.

Soegondho, S.

- 1996. Penelitian kepurbakalaan di Desa Aboru, Kecamatan Pulau Haruku, Maluku Utara. Report Ambon: Proyek Penelitian Purbakala Maluku.
- 2004. Kajian Permukiman dan Matapencaharaan Hidup Manusia Masa Lalu di Kepulauan Sangihe dan Talaud Sulawesi Utara (1). *Laporan Penelitian Arkeologi* No.13. Manado: Balai Arkeologi Manado.

Spoehr, A. 1973. *Zamboanga and Sulu: An Archaeological Approach to Ethnic Diversity*. Ethnology Monographs No.1. Pittsburgh: University of Pittsburgh.